

たき火にはこつが要るところがよい。まず落ち葉の積み方。初めに骨組みとして小枝を井桁型に少し組み、その上に落ち葉をまぶすようにふわっと積んでいく。形はできる限りとんがり形にする。風向きを考えて、山の両側にそつとトンネルを掘り風穴とする。安全のために水バケツを用意し、トンネルの中の小枝に着火すれば至福の時が始まる。

たき火にはいくつかの大切なポイントがある。第一に、例え濡れ落ち葉であっても自ら燃えようとする力を内に秘めていることを信じる。第二に、それ故にたき火の火をいたずらにいじらないようにすること。特に初心者は、火の調子が悪いときについてこの過ちを犯してしまう。どんなにくすぶっていても、落ち葉は一枚一枚燃え上がる時を待っているものである。白い煙を上げてくすぶっていたものが、少し黄色の煙を出し始めたものだ。黄色い煙は燃え始めのサインである。第三に、後から落ち葉をたす時も、常に「とんがり形」をこころが

け、上から優しく葉を落とすこと。第四に、もしも、どうしても消えそうな時は、中の小枝を少し足すこと。

いじられずに、ゆっくりと燃え切った落ち葉の灰は白く細やかで美しい。力を全うしたものの悔いのなさを感じる。それに対して、いじられた、たき火の灰は黒く荒い。いかにも燃え残りといった風で未練がましいような、恨みがましいような感じである。

幼稚園でも、山の大銀杏の枝が高い空を差すようになる頃、落ち葉たきをする。まず大きな木を組んで、その上に落ち葉をまぶし、大人の背丈もある大きなとんがり山を作る。周りにバケツを並べ、子どもが近付きすぎないようにライン引きで線を引いた後、いよいよ着火である。火は怒った龍の舌のように天をなめ、火の粉や落ち葉を空高く舞い上げる。子どもたちは、皆、空を指差し歓声を上げる。火は人を集め、人を興奮させる力を持つ。

冬は家なしにはもつともかなしいときでありま
す。火をたく家さえ持っていれば、だれでも身と
心とをやすめることができました。親や年よりが

子どもに手を出させて指と指とのあいだを、おさ
えていきながらこうとなえるのです。

子を愛するということにも、やはりひとつの刻限
のようなものがあつたのです。夕がた外の風がだ
んだんつめたくなるころから、家の中にはあかい
火がもえはじめます。母が庭においててまだいそが
しく立ちまわっているあいだ、あぐらのひざの上
に子をのせて、小さな手をあたたためてやるにも歌
がありました。それをだれから学ぶかというと、
じぶんが小さなうちに何十ぺんとなく、きかせて
もらつたのが土台になつているのですから、よっ
ぽど古いものということができます。

信州あたりにいまでもおこなわれているのは、

火い火いたもれ
火はないないと

あの山越えて

この田へおりて

このうちきけば

このくぼつたみにすこしこざる

または「ここへくりやちよっくりござる」などと
いって、こそぐつてわらわせるのであります。

柳田国男『火の昔』（昭和18年）

——火をたくたのしみ——より